

バスタブに湯を注ぎこみながら、彼女も又聞きなれた質問をした。

「お湯、普通でいい？ それとも？」

私もいつも通りの答えを返す。

「温い目がいいな、俺、汗かきなんだよ」

まだ着衣のままの女が、水色の印が付けられたコックを開くと、蛇口から注がれる湯の勢いが少し強くなった。

私は彼女の背中から腰、そしてタイトな黒のスカートに包まれた尻に視線を走らせる。

女は豊かな尻をしていた。その腰と尻のカーブを見つめるうちに、私は微かな勃起を自覚する。

女が振り返る、視線が合った。私は反射的に微笑みをかえず。女は視線を外さない。

「失礼します」

彼女は、あらかじめ決められているのであろう台詞を言い、大きめのバスタオルが敷かれたベッドに腰掛けている私の脚の間に跪く。手がスポンのベルトを外し、下着の上から私の既に半ば勃起している股間をまさぐりはじめる。

私はそんな彼女の手の動きを見つめる。

視覚はセックスの大きなファクターだ。下着から取り出した私のものを彼女は躊躇なく口に含む、一瞬私はこの店に入る前の地下鉄の駅で済ませて来た放尿を思い返す。

更に勃起が強まった。

女は亀頭の周辺から、その浅い窪みにかけて舌をはわしていく。まだ快感と言う程のものではない。

視線を彼女の顔に向ける。口は窄められ、目は閉じられている。私の中で欲望がゆっくりと膨張していく。

女の唇に少し力が加わり、勃起した剛直の竿の部分に快い圧力がかかった。彼女はそのま顔を前に進め、生え際まで深く啜えこんでくる。

女の唇と口蓋が微妙に動きはじめ、張り詰めた粘膜の上をすべる柔らかな舌が快楽を生んだ。

口の中の剛直を舐め回しながら女は、まだ下着に包まれたままの垂れ袋をなではじめる。時によっては剛直そのものよりも、袋への愛撫のほうが快感を生むものだ。

私はわずかに声を漏らす。

彼女の唇の端から粘り気のない唾液が、床に敷かれたタオルに数滴したたり落ちていく。私は彼女の顔に視線を向け続けている。目が開き視線が合う、または彼女はそらさなかった。彼女の唇の狭間から覗く私の剛直は、唾液で濡れ光っている。それは、この部屋の赤みかかった照明の為か、よりいっそう生々しく見えた。そう、まるで動物の一器官のようだ。

「一度出しちゃう？」

やはり、ほんの十分程前に合ったばかりの男のペニスを口にした事への照れがあるのだろう、わざと陽気な声で彼女が聞いた。だがそれは私にとっても同じ事だ、陽気に聞えるように答える。

「ああ良いね。俺、今日、元気だから」

その言葉を聞いた彼女の微笑みが、少しだけ本物に近くなった。

彼女の両手が、先端を唾えたままに剛直を挟むようにして力を加え、再び亀頭をほう舌が先程より大きく早く動きはじめた。

快感が剛直から尾底骨に向けて広がっていく。

男の射精までには二つの段階がある。まず快感が中心となる段階、この時なら射精を止める事が可能だ。そして次にくるのが快感を求めるよりも射精したいという欲望が強くなる段階だ、この時には快感自体は減少するが射精を止めることは(精神的に)不可能だ。

「うっ……！」

低くうめきを上げたその瞬間、私の視線はバスタブから溢れ出る湯にそそがれていた。

射精を終えた後の男は非常に敏感だ。私の精液が触れ、その味を感じているだろう彼女の舌が亀頭をはい回る度に、私は苦痛にも似た、しかし決して苦痛ではない感触を味わう。

多分、射精を終えた剛直を舐め回す時間が、他の店の他の女の時よりも多少長かった所為だろう、私は普段口にしない事を彼女に要求する。

「出すところを見せてくれよ」

一瞬戸惑った表情を浮べた彼女であったが、すぐに理解した。

私の見つめるなか、女の精液を含んだ顔が肯く。

女は、絨毯の上に置かれたタオルを取り上げ、顎の下に持つてくると、唇を開く。

女の唾液と私の精液が混じり合い、半透明に近くなった白濁が、原色の赤のタオルにゆつくりと糸を引きながらしたり落ちていく。

私は、口紅も施していない素のままの彼女の唇と、その唇に付着する白濁の残滓に視線を当てつつける。

彼女が、白濁を受けたタオルの汚れていない部分で口を拭ったのを汐に、私はベッドサイドに置かれた時計に目を向ける。

まだこの店に入り、女と顔を合せてから三十分と経過してはいなかった。

女が服を脱ぎはじめる。

ブラウスの下には黒いブラジャー、そしてスカートの下には同色のパンティ。一分とかからずに彼女は全裸になった。

胸は小振りである、大きめの乳首は少し色が濃い。夏のなごりの水着の跡が腰にまで続いている、セパレートタイプの水着だ。陰毛はこの商売の女らしく形が整えられている。

女のタイトなスカートに包まれていた腰はやはり豊かだった。私は女の腰、そして尻に舌を合わせ、歯をたてる事を想像する。

私はベッドから立ち上がり服を脱ぐ、上着はハンガーにそして下着は籠に。

タオルが敷かれた中央部分に凹みが作られている赤いプラスチックの椅子に座り、私は女に身体を洗われる。

ボディシャンプーの泡を充分に含んだスポンジが全身を擦っていく。

「痛くない？」

女が聞く。

「大丈夫、いつもそんなスポンジで洗ってるから」

私が答える。

女が私の背中に両腕を回して抱き付くようにして背中を洗う、揺れる乳首が胸板に触れ、うなじから微かな香水が匂った。私は女の腰から尻に両手をはわす。冷たく柔らかい尻だった。

女がスポンジを置き、両手にボディシャンプーを取って、私のものを扱くように洗う。泡にまみれた女の手の中の、私の先端から先程の射精の残滓である透明な粘液が滲みだしてきた。

続けて女は、私の袋を揉むように洗い、そしてその奥の窄まりにまで指をはわしてくる。浅く挿し入れた指を細かく動かしながら、女はシャワーで泡を落した私の剛直を再び口に含む。

女の窄めた赤い唇が、まだ完全には力を取り戻してはいない剛直を挟みこみ、前後に動く。先端を吸い上げられる鋭角的な感触。唇に柔らかく扱き上げられる時の鈍い快感。

私は再び欲情を覚え、剛直はすぐに固さを回復させた。

女は起立した剛直から顔を放し、そのまま私の太股を、そして膝を強く吸いながら舐める。膝は性感帯だ、女はわざと音を立てる。

もう一方の膝を吸った後、女は私にバスタブにつかるように促した。

私はバスタブの中で身体を伸ばしながら、女に目を向ける。こちらに背中を向けた格好でタイルの床に膝を付き、シャワーで秘部とその奥の窄まりを洗っている。尻の間から肉襞の狭間に

し入れられる指が見える。

バスタブに入って来た女が、少しだけ足を広げた格好で私の前に立つ。湯に濡れた陰毛とその奥の秘肉の合せ目が私の視線を引き付ける。

「して……」

女が言った。

私は女の股間の肉の丘に舌を這わせる、ざらついた陰毛の感触、ボディシャンプーの香りの中に微かに混じる汗と女の秘部の匂い。

舌を外側の肉襞の狭間に挿し入れると、女が股を開きバスタブの縁に足を乗せた。

あらわになった粘膜の感触が舌に触れる。私は、両手を女の尻に回し、少し強めに掴みながら引き寄せ、そして外側の肉襞の感触を舌で味わう。そのまま舌を進め奥の肉穴に浅く差し入れ、尿道のひしゃげた小孔を吸い、快樂の尖りを舐め上げる。再び奥に舌を挿し入れた時、舌先にぬめりが触れた。微かに海水の味がした。

「後ろを向いてくれないか」

私は女の股間から口を放して言う。

女が従順に肯き、私に背中を向ける。そのままバスタブの向こう側の壁に手を付き、尻を私に差し出しだす。

開いた尻の狭間から肉襞の下端と肛門が覗く。後の窄まりの横には小さな黒子一つある。

私は女の片方の尻房を掴みながらも一方に舌をはわせる。柔らかな肌の上の初毛を感じながら、舌を背中方向にはわせていく。背骨の下、尻が二つの半球を形成しはじめるあたりを舐め上げた時、女が小さく身体を震わせた。

私は、舌を女の尻の狭間にはわしていく。

「……」

女が何かを囁いた。だが聞き取れない。

舌が肛門を捉える。陰毛と同様に手入れされ、清潔に保たれているのだろう、石鹸の香りがあった。細かい襞を舐めたままに手を女の股間にもつていき、内側の肉襞の頂点で形をはつきりとさせはじめている肉の芽を摘み、指の間で愛撫する。親指でその上の肉穴に触れると、そこにはぬめりが溢れていた。そのまま親指を挿入する。肛門が窄まるのが舌先に感じられ、親指が締付けられた。

女が向こうを向いたままで脚を大きく開き、バスタブの両方の縁に手と膝を付いた。

尻とその狭間の秘部が極端に開かれ、秘肉の台形が剥き出しになる。

私は既に勃起しきっている剛直を握り、尻の狭間で開ききっている秘部に当て、亀頭の先端で愛撫する。女の滲ませたぬめりと、私が漏らす粘液とが交じり合い、短い糸を引き、亀頭にまとわりついてくる。

開いた両方の尻房を手で鷺掴みにして、二つの親指で女の秘部を裂くかのように大きく開く。淡い色をした粘膜が張りを見せ、その奥の肉穴の形状までをも晒け出された女の秘部に、私は剛直を突き入れる。深く奥まで犯したとき、女が小さくうめき声を発した。

私は挿入の快感に蠢く女の尻と肛門、そして剛直が前後する度に歪み、秘肉を絡み付かせてくる秘部を見詰め続ける。

セックスそのものを楽しむ余裕は、既に私にはなかった。まるで「射精」というゴールに突進するランナーのように私は腰を動かし続ける。

絶頂の瞬間はすぐにやって来た。

射精だけを目的にしたようなセックスの後はペニスの萎えが早い。少し腰を引くと女のぬめった肉穴から力を失った剛直がすべり出し、その後を追うようにして肉襞の狭間から白濁が溢れだした。

微かに泡立ったそれは、湯の中にしたり落ちて行った。

一度抜かれ、再び注がれている湯で、私の頭の向こうのバスタブがあふれはじめた。

タイルの床に敷かれたエアマットの上に私は、全身にローションを塗られ仰向けに横たわっている。

女は私と同じくローションにまみれたその身体を密着させ、ぬめらせていく。その身体の柔らかさとほのかに熱い体温、陰毛のざらついた感触を私は楽しむ。

女が私の胸を吸いながら、ローションをたつぷりとまぶした手で股間を刺激しはじめる。

二度の射精の為か私は、剛直に加えられる刺激よりもむしろ、胸をほう舌の感触によった勃起を意識した。

手が私の回復を確かめたのだろう、女は巧みに私の上で身体を回し、股間に顔を寄せていく。

私は目の前の、私を跨いだ格好の女の尻を視姦する。豊かな二つの肉の狭間はローションにまみれており、その向こうに陰毛がへばりついた秘部とその上の小さな窄まりが見える。

私は両手で尻を撫で回しながら、勃起が激しくなりつつあるのを意識する。

女の身体がすべり、尻が、そして秘部が、私の目の前にせまる。私はローションにまみれたその狭間に口を押し付ける。ローションには味がほとんどない、口に入ったぬめりを吐き出し、舌を肉穴にぬめりこませる。舌先が熱い感触に包みこまれる。

私は肉穴の中で舌をくねらせ、そのなめらかな凹凸に覆われた内部を味わう。無味なローションの向こうに別の味が滲み出しはじめた。

充分に女の中を味わった後、私は口を秘部から離す。

女が後ろを向いたまま身体をすべらせ、尻を持ち上げた格好となり、そして手を添えた剛直

を、自分の中に挿入する。

女はその合わさった部分を私に見せつけながら尻を上下に振りはじめ。肌色に近い外側の肉襞に挟まれた剛直が膣壁に擦られ、ローションが愛液をまねて細い糸を引く。

ぬめった感触に包まれた剛直の先端に、私は女の最深部の熱い体温を感じる。

女がその結び合った部分を中心にしてくりと身体を回すした。

視線が合い、女が問いかけてくる。

「もう一回このまま出しちゃう？ それともベッドでゆっくり……」

「ベッドの方がいいな」

私は女の乳首をいじりながら答えた。

湯が満たされたバスタブに身を沈めると、あふれた湯がタイルの床に残った泡やローションを洗い流していく。

シャワーで身体を洗った女がタオルを使った後、私に言う。

「いいわよ」

私は湯から出る。

ベッドに腰を下ろし、コップに注がれたコーラを飲みながらの女との取留めもない会話。

女の年齢が解った、私より一つ下だ。この商売に入ってまだ二ヶ月たらずだと言う、理由や経歴は女から言い出さなにかぎり、問うのはタブーだ。そう、お互いの。

会話はコップのコーラがなくなるまで続いた。だが私の本当に聞きたかった事は言いだせず、終わった。

女が私の腰に巻かれたバスタオルを取ろうとすると、私は少し腰を上げてそれを助ける。

女がまだベッドに座ったままの私の股間に顔を寄せ、剛直をさすりながら垂れ袋を舐めはじめ。る。

そんな女の舌の動きを見下ろす私の視線と、女の視線とが合う。またも逸らされないそんな瞳を見つめるうちに、女の手の中で私の剛直が固く張り詰めていく。

女の手が剛直を強く握り、指の腹で亀頭を撫で回しはじめ。

唇が開き垂れ袋を大きく啜えこんで来たとき、私はその女の顎に手をかけ、引き離す。そのまま一方の脚をベッドに上げて、大きく開いた股間の奥に女の顔を持って行く。

私の肛門に女の舌がはいはじめ。

女は私にベッドにうつぶせになるように求め、背後から私の開いた脚の狭間に顔を寄せてくる。

剛直とその下の袋、そして肛門を女は舐めまわす。私はベッドの横に張られた鏡に写しだされている女の行為と、肉体的な快感とによって昂ぶりを深めていく。

私は姿勢を変え、ベッドの上に大きく足を開いた形で座る。固く勃起している剛直を握ると、鈍い快感とともに亀頭の部分が更に膨れ上る。先端の窪みから透明な粘液が染みだす。

女は私にうながされるまでもなく亀頭に舌をはわせ、その粘液を舐め取った。

「後ろを向いて」

私は女に要求する。

女は大きく足を広げ、背後の私に向けて尻を突き出した。さらにその尻を押し広げて狭間の剥き出しになった秘部の内側に舌をはわすと、濃い粘液が肉穴から流れ出してくる。

私は女の肉の芽に被さった包皮を指でずり下げ、尖りを見せるその先端から薄い桜色をした真珠色の球を剥き出しにする。

女の秘部を濡らすしたたりが、電灯の光を反射し鈍く光った。

人差指を女の中に挿入し、すぐに抜く。指に付着したぬめりをゆっくりと女の肛門に塗り付けると、窄まりが蠢くように収縮した。

私は焦らすように窄まりの回りに指をはわせながら、先程の会話の中で言出せなかった事を女に聞く。

「さつき風呂の中で俺に尻を舐められた時、なんて言ったんだ？」

「え……?」

女の声は微かにかすれている。

「何か言っただろ、あの時。聞き取れなかったんだ」

「そんな事……」

私は指を女の肛門に浅く挿入する。

「あつ。……う、うれしい……って言ったの……」

「そうか……」

私は女の小さな窄まりの中に指を深く挿し入れ、そのまま剛直で肉穴を犯す。

女が小さな声を上げ、腰を前後に振りはじめた。私もまたその動きにあわせるように腰を動かす。

肉襞の間から出し入れされる剛直は、女の昂ぶりと快楽を示すように濃いついでぬめっている。

私の太股に女の尻が当り、柔らかく歪む。肉穴が蠢き締付けてくるのが感じられる。

剛直の中を快楽が走り、肛門に挿入した指にもその動きが伝わってくる。

私の腰の動きが早くなる、それは半ば本能的な動きだ。

「!!」

三度目の射精の所為か、その快感はさほどでもなかったが、かなりの量と勢いであったのが自

覚できた。

女の尻が私の腰に押し付けられ、くねる。まだ中にある剛直が刺激され、射精後特有の鋭角的な快感が走る。

剛直が再度痙攣するように震え、発せられずに残っていた白濁が女の中に吐き出されていった。



女とボーイの見送りを受け、私は店をでる。

胸ポケットには女が帰り間際に私に渡した名前と出勤日のカレンダーが印刷された名刺が入っている。

取り出して見ると、その名刺にはボールペンで書き加えたらしい一つの電話番号と「田村美佐子」と言う名前が書かれていた。

部屋で女が名刺を渡す前に私に背中を向けて何をしていたのがこれで解った。

私はその名刺を財布にしまいこんだ。

以下、次回へ